

町民みんなで にぎやかに 50周年祝う 生きいき「ひの」ふれあいまつり



ジミー柴田さんのマジックも



幻想的な明かりの展示



お楽しみ抽選会はイベントの目玉



心を一つに、紡ぎ出すハーモニー



野菜やみそ、豆腐など大人気のジゲ自慢コーナー



無線インターネット体験に興味津々



まちの皆さんの交流や活力あるまちづくりのため、10月24日と25日の2日間、第32回生きいき「ひの」ふれあいまつりが、役場前や山村開発センターなどで開かれ、農産物や食品などを販売する即売部門、文化団体などの作品を展示する展示部門や芸能発表などが行われました。

また、今回は町制50周年を記念し、地域の特産物を販売する「ジゲ自慢コーナー」や、金持青年会による獅子舞、久住寿来の会によるもちつきなどもあり、多くの人出でにぎわいました。



町制50周年を祝うもちつき



多彩な展示部門の作品をゆっくり鑑賞



津軽三味線の力強い響き





著書やテレビ出演も多い森岡さん

「日野」は「火の国」か

▼「日野という地名の由来、金持党のルーツを探る」講演会

金持伯耆守広親公就任 800 年・金持大和守景藤公生誕 700 年を記念し、10 月 25 日、「金持党発祥の地」碑と碑文の除幕式が町観光協会により行われました。

これに伴い、碑文を書いた姓氏研究家、森岡浩さんの講演会が10月24日に町文化センターで開かれ、講演内容について森岡さんに寄稿いただきましたので 11・12 月号に分けて紹介します。

古代の地名は漢字伝来で大きく変わる

「日野」という地名は「日」に「野」と書く。地名の由来を考える際に、ついその漢字に影響されてしまうことが多いが、地名でも名字でも、あまり漢字にこだわると本来の意味を見失うことが多い。

そもそも、漢字が日本に伝来したのは五世紀ごろとされる。しかも、当初は漢字の音だけを使用していた。漢字の意味から訓読みを使用し始めるのは平安時代ごろからだ。

ということとは、古くからある地名や名字は、まず「地名」

特別寄稿「日野という地名の由来」

森岡 浩

があつて、あとから漢字を当てている。つまり、漢字は後付けなのだ。

また、奈良時代に「地名は漢字二文字にせよ」とされたため、古代からある地名は、この時点で大きく変わっていることが多い。たとえば、今の和歌山県はかつて「紀」の国といった。ここをルーツとしたのが紀氏で、子孫からは土佐日記で有名な紀貫之がでてくる。しかし「紀」一文字では認められず、「伊」をつけて「紀伊」となった。同じことは各地で行われたのだ。

たたら製鉄と地名のつながり

さて、鳥取と鳥根の県境付近は、歴史の古さでは日本でも有数。一般には出雲地方が有名なため、鳥根だけが古代から栄えていたような印象が強いが、実はこの国境や県境は後から政治的に引いたもの。もともと両県境は一つの古代製鉄文化圏だった。

たはずだ。

日本神話にヤマタノオロチの話がある。スサノオノミコトが天上から鳥髪山（船通山）の「肥の河」に降り、ここでヤマタノオロチを退治した。そして、オロチの体内から出てきた剣が天皇家の三種の神器の一つとなる。これは、大和朝廷が製鉄で栄えた出雲王国を支配下にしていたことを意味するのだ。しかも、天皇家の権力の三分一は出雲王国にあったことを示している。

この出雲王国の地は「ヒ」と呼ばれていた。漢字が入ってくる前なので漢字はない。そして、「ヒ」の由来はヒハヤヒコノミコト（極速日子命）とされる。国産み神話

出雲とのつながり表す、共通の名字の分布

実は、名字からみても、この地域と出雲とのつながりは明らか。日野郡付近に多い、景山・門脇・青戸・勝部といった名字は、実は鳥根県が本拠地である。名字は人に付随しているものなので、行政区分

では、火の神カグツチを産んだイザナミノミコトは、大やけどをして死んでしまう。そこで、怒ったイザナギノミコトがカグツチを斬り殺した際に、その血から生まれたのが、ヒハヤヒコノミコトである。このヒハヤヒコノミコトもまた火の神であった。

たたら製鉄では火は重要だ。つまり、ヒハヤヒコノミコトはたたら製鉄を行っていた豪族の神で、その支配地を「ヒ」と呼んでいたのではないかと。その後、この地域は出雲と伯耆に二分され、奈良時代には漢字二文字にする必要が生じた。その際、出雲側の「ヒ」は「斐伊郡」に、伯耆側は「日野郡」になったのではないだろうか。

とは関係なく、同じ文化圏では名字の構成が同じになっている。

県を越えて奥出雲とともに一つの「たたら製鉄文化圏」をアピールするののも一つの方法だろう。